

アジ研流 読書案内

—研究者が薦める3冊

「乱世」に強い政治学 アラブ諸国の激変を読む

池内 恵

政治家について「平時の誰々」「乱世の誰々」などという評し方があるが、政治研究者にも「平時」

すなわち政治体制や構造が長期に安定している時期に、実証データや厳密な概念構築を着実に進めるタイプと、「乱世」すなわち新しい政治社会現象が生じ体制が変動する時期に、変化をいち早く察知し解明していくタイプがいていい。

アラブ世界は今、激変期にある。過去には各国であまりに長期間の安定政権が続いていただけに、それに適したタイプの研究、すなわち「これまでこうだったから今後もこうだ」という議論が主流だった。しかし二〇一一年に突如として水面下の圧力が噴出し、諸国で軒並み体制が動揺、崩壊した。根底の規範や枠組みにおいて変化が急速に進む現在、「乱世」に強い

研究者が求められているのではないか。

●平時の「サイエンス」と乱世の「アート」

しかし「乱世」に強い政治学者というのはそう多くはいない。これは政治学の永遠の課題にも関わっている。すなわち政治学は「アート（芸術・技工）」か、あるいは「サイエンス（科学）」か、という問題である。サイエンスたらんとすれば、万人が一定の手続きを踏めば理解し、参加できるものにしなければならぬ。条件を限定し、特定の因果関係を仮定し論証し、反証して深めていく。これは確かに手堅いし、多くの人間が参加することで、集合知としての強みが出る。

ところが政治という現実社会の現象は、そもそもそのようなサイ

エンスの対象となり得るのか、という根本的な問題がある。政治という複雑で、あまりに多数の要因が絡んだ現象は、サイエンスで限定して分析してしまっていないだろうか。ここに「アート」としての政治学」の余地がある。こちらは少数の勘の良い研究者の、幅広い学問領域を横断した感性と表現力に多くを依存する。それは必ずしも集合知とはならない。多くの場合は学説を検証しようがなく、「分かる人には分かる」という時期が長く続く。現実には事態が展開して誰の目にも明らかになることによって、ある説が認められる。

私は、「アート」としての政治学」は「乱世」の時代にこそ有益であると思う。アートはサイエンスを否定するものではない。「乱世」もある程度続くと、「事例」が積み重なって、サイエンスの対象と

なる。そのころには「乱世」も収まってくる。それまでの間は、「アート」としての政治学」に強い人間が、現場を駆け回り、書齋に引きこもり、適切な補助線をひらめきで引いて示すしかない。

世界を見回すと、アメリカでは圧倒的にサイエンスとしての政治学が優勢だ。アラブ世界についての政治学でもこのことが言える。中東現地からの移民や留学生を多く引き寄せ、英語を共通言語にして、共通の述語を駆使した学会と学術出版の連続と競争に基づいて、集団で活発に成果を挙げていく。しかし激変期には、このような手続きによる集団知の形成プロセスでは即応できない。

「乱世」に強い学者はヨーロッパ大陸の方が多いと私は感じている。英語圏・英米圏の研究体制は、盤石過ぎるがゆえに自由な発想の研究者が現れにくいものかもしれない。また、西欧社会での知識人のエリート的なあり方もここには関係しているだろう。

●乱世の時代のアラブ論

「乱世」の政治学の好例は、フランスのパリ政治学院教授のジル・ケペルである。ケペルは一九

八一年、博士課程の学生としてエジプトでイスラーム主義諸組織の研究をしている時に、ジハード団によるサーダート大統領暗殺の事件に遭遇した。それを踏まえた処女作『預言者とファラオ——エジプトのムスリム過激派』は、「アート」としてのひらめきに満ちている。この本はケペルの世界的な名声を確立したが、万人にとって使いやすい分析概念を示してはくれない。目の前に生起していて、誰もまだ名前を与えていないものを、直観的ひらめきで記述していくからである（原著は一九八四年にフランス語で出たが、英語版が版を重ね、世界の研究者の手に広く渡っている。参考文献②）。

ケペルの政治学のアートとしての卓越性を支える感性、すなわちケペルが中東を見る「視線」の向かい方や、物事をとらえる「感覚」という、数値化したり万人が共有したりしようがないものを追体験させてくれる著作として、『中東戦記』をお薦めしたい（参考文献①）。二〇〇一年の九・一一事件の余燼冷めやらぬ時期に各国をまわり記したフィールド・ノートだが、単なる「時局もの」ではない。その後の一〇年の中東の社会変動

を、そして二〇一一年にアラブ諸国で噴出した政治変動の予兆までも鋭敏に感じ取り、的確に記していたものであった。

ケペルは九・一一の当時、ビン・ラーディンに熱狂する浮足立った世論の存在をアラブ諸国で目撃しつつも、それが移ろいやすく、容易に別の方向に転じかねないことを予見していた。アラブ世界が尽きせぬイスラーム化の流れの中にあるように見えながら、しかしグローバルなメディアと消費文化に急速に侵食され、西洋とイスラーム世界を横断するハイブリッドな空間が各所に生まれていることを記す。これは二〇一一年の政治変動の根源だろう。

各地の固有の文化の描写も、漫然と花鳥風月を描いているわけではない。例えば（前略）アラウィー派の政権有力者の二人と会う。アラウィー派の容貌があまりにも似通っていることに愕然とさせられる。体格はずんぐり、頭蓋は長く、後頭部は絶壁、という、まさにハーフィズ・アサドの肖像そのものだ。アジア大陸の奥深くで同族結婚を繰り返してきたかのようだ」（参考文献①、七六ページ）といったちょっとした描写からも、同族や

同郷、同宗派や姻戚で政権を固めるアサド政権の「血の濃さ」が生々しく伝わってくる。蜂起した多数の国民に武力で対峙し続ける一〇年後のアサド政権の姿を暗示しているかのようだ。ケペルの感性は、背後で確固とした論理に支えられているがゆえに、記述対象の取捨選択も、切り取り方も的確になる。

中東の現代政治を、根底の歴史・文化的あるいは社会的変化を踏まえて論じて来たのがマックス・ローデンベックである。アメリカ人だがエジプトの上流・知的社会に根を張った家族の一員で、一〇代から現地社会に溶け込んでいる。エジプトをフィールドにした人なら手にしたことがあるはずの旧市街の歴史地図は、彼が雑踏や廃墟を踏破し、朽ち果てたモスクやマドラサ（学院）や墓廟を一つ一つ記して作成したものである。主著『カイロ』（参考文献③）は、考古学やイスラーム中世史から論じ起こしつつ、現代のカイロの社会・文化的「地層」の読み取り方を明かした。多様で複雑な階層分化、最下層から上流階級までが入り組んだ街区の構成、リベラル派とイスラーム復古主義派の強烈なコントラスト、宗派コミュニティ

間の緊張と摩擦など、ムバーラク政権の崩壊で籠が外れて噴出するエジプト社会の矛盾や問題の多くは、本書ですでに論じられていた。英語圏のエジプト報道を読んでみると、今でもなお、ローデンベックがこの本で示したトピックや論点を後追い取材したものが多い。世界のエジプト認識・報道のあり方を規定している本である。ローデンベックはその後『エコノミスト』の記者に採用され、中東報道を統括している。記者の匿名を原則とする『エコノミスト』が、ローデンベックに関する限り、時に署名入り原稿を載せる。玄人的読者を引寄せる目玉の筆者ということだろう。

（いけうち さとし／東京大学准教授「イスラーム思想・中東現代政治」）

《参考文献》

①シル・ケペル「二〇一一」（池内恵訳）『中東戦記——ポスト9・11時代への政治的ガイド』講談社 選書メチエ。

②Kepel Gilles [1985] *Muslim Extremism in Egypt: The Prophet and Pharaoh*, Berkeley, University of California Press.

③Rodenbeck, Max, Cairo [1999] *The City Victorious*, Cairo, American University in Cairo Press.